

思いやりと生命尊重の意識をはぐくむ生活科での取り組み ー「小動物飼育サポートネットワーク」の整備による飼育体制ならびに指導体制の確立ー

関田 義博

1 はじめに

東日本大震災以後のテレビや新聞等では、震災で失われてしまった命、生き残った命、それぞれの尊さやかけがえのなさが繰り返し報道されていた。しかし、子どもたちの生活に目を向けると、命の大切さを言葉でわかっているにもかかわらず、命への実感を伴った理解が十分でないと感じられることがよくある。また、道徳教育では生命尊重をねらいとする学習が資料集等を活用した読み物世界を中心に行われ、社会ではバーチャル空間でペットを育てるゲーム機が当たり前のように売られている。命を大切することは社会で最も大切にすべき価値であるのに、それが十分に行われていないと考えられる状況はあまりにも多い。また、TIMSSによる調査結果（2007年）からは、日本の子どもたちの生活習慣の問題が指摘されている。調査によると、日本の小中学生は国際平均値と比べて学ぶ意欲や学習習慣に課題があり、テレビやビデオを視聴時間が長く、家の手伝いをする時間が短いという結果が出ている。

本研究では、小学校低学年児を対象に、思いやりと生命尊重の意識をはぐくむ実践を生活科学習を中心に行うことを考えた。小動物だけでなく人も含めた生き物の生命を尊重する心情をはぐくむために、児童が小動物をだっこしたり、えさを与えたり、糞を掃除したり、ときには死に立ち会ったりして、小動物と積極的にかかわる場を設定することが重要であると考えた。そこで、そのような環境を校内に整備することから活動を始め、3年間で主に(1)～(3)の取り組みをした。

- (1)「小動物飼育サポートネットワーク」の整備と積極的な運用
- (2)休日に行う「親子飼育サポート活動」の取り組みとその評価
- (3)生活科における「ふれあい学習」及び「親子ふれあい活動（PTA活動）」の実施

と評価

これらの取り組みを通してねらいとするものは、以下の2点である。

- ①小動物と進んでかかわらせ、自分と小動物との距離やふれあい方の変化に気付かせていくことで、小動物を守り育てている意識と自分自身の存在意義を見いださせる。
- ②小動物の飼育や世話を仲間とともに行うことのよさを味わわせながら、自らの生活をよりよくしていこうとする態度と、人を含む生き物の生命を尊重する心情をはぐくむ。

子どもたちが責任を持って小動物とかかわることができる、「自分は小動物に頼られている」「自分は小動物にとって必要な存在なんだ」という自己有用感が子ども一人ひとりにはぐくまれていく。兄弟がいない、少ない今の子どもたちは、下の兄弟や小さい子の世話をする経験ができていない。そのような子どもたちが小動物の世話をを行うことができると、やさしい気持ちで世話したことに対して、多くの小動物が「逃げない」「近寄ってくる」「なつく」といった行動を示し、思いを子どもに返してくれる。これにより子どもたちは、動物だけでなく友達や自分より小さな相手に対しても思いやりの気持ちを持って接することができるようになる。また、自分たちの取り組みが小動物の生命をつないでいるという思いは、生きる自信にもつながるものとする。

2 テーマ設定と社会的背景

(1) 自然体験の不足

子どもの自然体験が不足している問題は、今に始まったことではない。最近では2011年3月11日以後の福島第一原子力発電所からの放射能漏れの問題が子どもたちから自然体験

を奪っているという現実もあり、2011年度は東京近郊であっても、野菜作りや落葉集め等の活動を自粛した学校があった。

さらに、かつて鳥インフルエンザやSARS（重症急性呼吸器症候群）が社会問題化したときには、一部の学校では動物が子どもたちから隔離されてしまうという事態が発生した。この問題は、今もなお尾を引いている。動物飼育の安全性を疑問視する一部の声や様々な誤解等により、動物飼育を一時中止したあとに再開できない学校もある。体験を伴わない学習では、驚き、喜び、感動等を実感することはできないが、その実施を阻む要因が社会には今もなお数多く氾濫している。

(2) 情報化社会の弊害

現在、シミュレーションゲームとして動物を飼育するゲーム機が流行している。このようなゲーム機における架空の動物とのかかわりでは、子どもは動物の真の姿を理解することができず、逆に認識を誤ってしまうおそれもある。動物が持つあたたかさやぬくもりはもちろんのこと、動物との心の交流、死による悲しい別れ等を体験することもできない。子どもが動物の死に直面する機会が乏しくなっているということは、今生きている身のまわりの生き物や家族を、改めて「生きている」と認識することができなくなっているととらえることもできる。そのため、子どもの近くにいる動物は、子どもが生と死、喜びや悲しみを理解できる大切な存在と考えることができる。（以上図1）

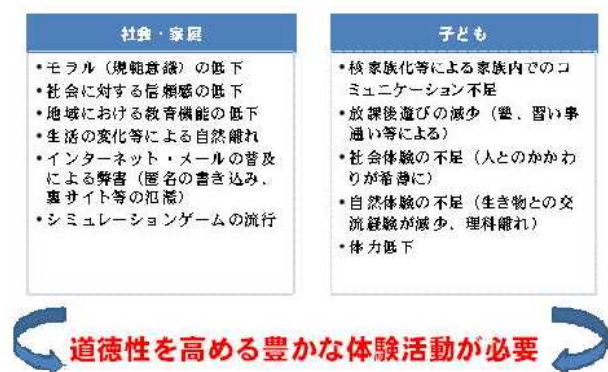


図1 豊かな体験活動の必要性

3 「生命」のとらえ

本研究では、生命を①～④のように考えた

（表1）。生命を単に死の反対を意味する言葉としてとらえるのではなく、さまざまな道徳的価値を含む言葉として多面的にとらえることにした。これは、西東京市立向台小学校と中野区立鷺宮小学校で実践された動物飼育研究において構築された考え方を基にした。

①の「共存性、共生性」については、小動物が持つ命だけを対象にするのではなく、「児童の命や生活もたがいに支え、支えられている」というとらえ方である。また、②の「有限性、唯一性」については、児童が動物の死に立ち会ったときに実感せざるを得ないことである。大切な人、ペット、小動物等の死に立ち会い、深く悲しみ、しばらくして死を受け入れることで、児童はあらためて死の尊さと命のかけがえのなさを理解できる。さらに、③の「神秘性、偶然性」と、④の「連続性、継続性」については、児童が動物の誕生場面を目の当たりにしたときなどに、新鮮な驚きや感動とともに実感できることである。本研究では生命をこのようにとらえ、生命尊重の意識を児童にはぐくんでいくことにした。

表1 「生命のとらえ」

- | |
|---------------------------|
| ①共存性、共生性…たがいに支え、支えられているもの |
| ②有限性、唯一性…はかなく、一回限りのもの |
| ③神秘性、偶然性…不思議さに包まれ、偶然なもの |
| ④連続性、継続性…受け継ぎ、受け継がれていくもの |

4 学習指導要領における位置づけ

平成20年3月に告示された『小学校学習指導要領』では、めざす教育内容の主な改善事項として2番目に「理数教育の充実」、4番目に「道徳教育の充実」、5番目に「体験活動の充実」が挙げられている（次頁表2）。そのため、理科の指導内容と授業時間数が増えたが、生活科でも自然を対象とする学習の充実が重視されることになった。本研究では、動物飼育にかかわる体験活動を充実させることで、言語活動の充実も図っていくこととする。

表2「新学習指導要領がめざす改善事項」

新学習指導要領（23年4月～）がめざす教育内容の主な改善事項
1. 言語活動の充実
2. 理数教育の充実
3. 伝統文化に関する教育の充実
4. 道徳教育の充実
5. 体験活動の充実
6. 外国語活動の充実

5 研究の方法

(1)「小動物飼育サポートネットワーク」

本研究で考えた小動物の対象は、児童が安全にかかわることのできる身近な生物すべてとした。そのため図2の「本園」には、「なでし湖（クロメダカや水生昆虫等が棲むビオトープ）」等も含めることにした。このネットワークを整備する意義は、以下の①～③である。

- ①本園と分園それぞれの機能を生かし、教育活動に有効活用すること。
- ②児童が小動物の命を学校関係者と連携、協力して、大切に守り育てること。
- ③獣医師の指導、協力の下、動物を健康な状態で守り育てること。

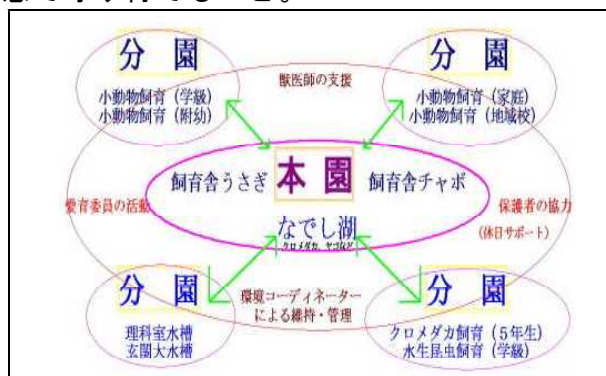


図2 「小動物飼育サポートネットワーク」



▲子どもがうさぎとかかわりにく（本園）



▲子どもと教師による手づくりの「なでし湖」（本園）



▲幼稚園へのチャボの貸し出し（分園）

(2) ネットワークの活用

①「親子飼育サポート活動」の取り組み

「親子飼育サポート活動」は、児童が休日に保護者と一緒にうさぎやチャボの世話をを行う取り組みである。本校の動物飼育の考え方は、平日は愛育委員会の高学年児童と生活科を学習する低学年児童が中心に世話をを行い、休日には希望する親子が世話をを行うというものである。必要に応じて獣医師が動物の健康状態を診てくれているため、児童は健康な動物たちとかわることができる。また、積極的に活動する児童と保護者には、動物への愛着や愛情だけでなく、学校との連帯感、愛校心がはぐくまれている。飼育サポート活動に参加する親子の募集は、全校にプリントを配布して行う（次頁図3）。保護者は都合のつく日を申込書に記入し、申込書は副校長が回収する。副校長は同じ日に多くの親子が集中しないように人数の調整を行い、分担表を作成して参加する親子に配布する（表3）。

活動には毎回2～3組の親子が参加する。



②「親子ふれあい活動」の実施

から、「動物の扱い方について専門的なレクチャーをして欲しい」という要望があったからである。

1. ねらい ①学校獣医師の話聞き、動物の世話や掃除の仕方を理解する。
②うさぎやチャボとふれあい、動物のあたたかさや命を実感する。
2. 日時・場所 2011年7月9日（土）
10時～11時30分・体育館
3. 対象 ○活動に参加したことがある人
○活動への参加を考えている人
4. 内容 ①獣医師の話 ②動物とのふれあい

6 生活科での授業実践

平成20年3月告示の小学校学習指導要領生活科には、「動物や植物へのかかわり方が深まるよう継続的な飼育、栽培を行うようにすること」という配慮事項が明記されている。そこで東京学芸大学附属小金井小学校において、うさぎとの「ふれあい学習」を、1年生（1年1組児童数40名）を対象に試行的に実施した。多くの1年生がドキドキしながら初めてうさぎとふれあい、活動後は気付きや感想を学習カードに記入した。

(1)「ふれあい学習」の計画

①実施時期

2012年1月20日（金）～2月3日（金）

②対象学級

東京学芸大学附属小金井小学校 1年1組児童40名（男子20名、女子20名）

③単元の目標

ア) うさぎに興味を持ち、思いやりの気持ちを持って世話をしようとする。（関心・意欲・態度）

イ) 人間が世話を続けることでうさぎは命をつないでいると考えることができる。（思考・判断）

ウ) うさぎの特徴や人との違いに気付くことができる。（気付き）

エ) うさぎとかかわったときの思いを人に伝えるため、表現を工夫することができる。（表現）

④単元の計画・主な学習内容（6時間）

第1, 2時:「うさぎにやさしくふれてみよう」

- ・学校にいるうさぎの名前や特徴を知ること
- ・抱くときに気をつけることがわかること
- ・ぬいぐるみで抱っこ練習（本物との比較）
- ・うさぎとのふれあい

第3, 4時:「うさぎにすきなたべものをあげよう」

- ・うさぎの生活を知ること（すみか、食べ物）
- ・ふれあいとえさやり

第5, 6時:「おうちをきれいにしてあげよう」

- ・小屋の掃除の仕方を知ること
- ・グループに分かれて掃除とふれあい

(2)授業づくりで大切にしたこと

①興味・関心を高める手だて（第1, 2時）

ー「だいに育てられてきたんだね」ー

手だての一つは、第1時に飼育しているうさぎの生い立ちをまとめたスライドを児童に提示したことである。スライドは8枚で構成され、スライドや写真を見ると、4羽の親子関係、2羽の子どもが生まれるまでの過程、親うさぎの出会い、これまで4羽が大切に育てられてきたことなどがよくわかるように作成されている。

○導入で使ったスライド(8枚のうち5枚)

宇佐木家(うさぎけ)の家族紹介

お父さん : キラ 2007年10月生まれ
お母さん : モカ 2007年 8月生まれ
子ども(男): チョコ 2009年12月生まれ
子ども(女): ロール 2009年12月生まれ
1年生のみん 16-06 ~2005年生まれ



キラ



モカ

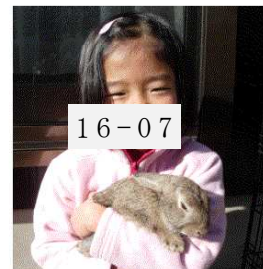


チョコ



ロール

お母さん(モカ)が子どものころ



16-07

お父さん(キラ)が子どものころ



16-08

モカとキラが... (飼育舎の中)



16-09

赤ちゃんがたん生(わらと毛のベッド)



16-10

②さわってみたい気持ちを高める手だてー

「佐藤先生のぬいぐるみなんだ!」ー

活動への気持ちが消極的な児童に対しては、うさぎに無理にさわらせるのではなく、まずは「さわってみたい」「だっこしてみた

い」という気持ちを引き出すこと、高めることを大切にしたい。そこで、第1,2時の学習活動では、子どもたちの前で教師がうさぎを抱いてみせ、正しく抱けば安心してうさぎにふれることができることを伝えた。また、活動に対して前向きな児童にうさぎへの思いを発表してもらい、「さわりたい」「だっこしたい」という気持ちを全体で高めていくことにした。

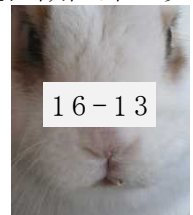
うさぎにさわったときの感じ方を引き出すための手だてとして、はじめにぬいぐるみにさわって、そのあとで本物のうさぎにさわるという活動を取り入れた。ぬいぐるみとうさぎを両方さわって、感じ方を比較させることで、言葉による表現の違いを引き出そうと考えた。子どもたちには、「本物のうさぎさんにさわる前の練習だよ」と伝えて、順番にぬいぐるみにさわるように指示した。ぬいぐるみは2つあり、1つがミッフィーで、もう1つが茶色のうさぎである。茶色のものは保健室から拝借したぬいぐるみで、佐藤牧子養護教諭の私物であった。佐藤教諭が子どもの頃に両親から買ってもらったものである。佐藤教諭が両親に「うさぎを飼いたい」と頼んだところ、両親から「あなたはまだ小さくて本物のうさぎを飼うことはできないから、ぬいぐるみで我慢しなさい」と言われ、佐藤教諭はこのぬいぐるみを長い間大切にしてきたそうである。この話を聞いた子どもたちは、ぬいぐるみを大切に扱いながら順番に感触を確かめていた。

▲本物のうさぎはやわらかくてあたたかいね

③うさぎへの理解を深めさせる手だて

うさぎが餌を食べる際、歯が重要な働きをすることは1年生でもよくわかる。そこで餌やりの前に、お父さんうさぎのキラ君が不正咬合であることを説明した。児童に、「キラ

君は子どもの頃ケージの針金をよくかじっていたため顎がずれ、不正咬合になってしまった」と話した。また、前日には愛育委員会の活動があり、キラ君の前歯を益田獣医師が切ってくれたことも写真で紹介した。児童はキラ君のことが心配になり、スライドを食い入るように視ていた（写真右上）。



▲うさぎの歯はとってもだいじだね（右が伸びた歯） ④「おうちをきれいにしてあげよう」

第5,6時は、前時に複数の児童が発表した「うさぎさんのおうちをきれいにしてあげたい」という願いを、全体で共有するところから学習を展開した。話し合いの結果、掃除はうさぎ小屋だけでなくチャボ小屋も行うことにし、チャボ小屋の担当には「親子飼育サポート」に参加してチャボの扱いに慣れている児童を割り当てた。仕事の分担は教師と児童が一緒に考え、児童は6つのグループに分かれて活動に取り組んだ。活動後に児童は、「またお世話したい」という願い、「小屋がきれいになってよかった」「そうじはたいへんだった」といった感想、「うんちが畑の肥料になることをはじめて知った」といった気づきを学習カードに記入した。

7 実践の結果

(1)「親子飼育サポート活動」に参加している親子の声より

「徐々に育まれる責任感や愛着」

ある日、娘が「ママ、うさぎを飼いたい」と肩を寄せてきました。「じゃあ、まず、学校の飼育サポートでがんばってみたら？」と……。それが飼育サポートをお手伝いさせていただききっかけでした。はじめは、チャボ小屋に入るやいなや、「うっ、くさい、きたない・・・」等々。何回か飼育をしているうちに、動物も人間と同じように毎日餌を食べ、水を飲まないと死んでしまうからと、呟きながら餌をあげるようになり、飼育への取り組みに彼女なり



に責任感や愛着が生まれてきたようでした。動物飼育は、動物がかわいい、愛情を持って育てた動物が死んでしまったら悲しい、そんな経験が脳や心を動かし、子どもの人格形成に役立ち、生き物に対する愛情が生まれることは、中川先生もおっしゃられています。今後は、もっと積極的に保護者の方々に動物飼育の意義をアピールして、より多くの児童、保護者が参加する大きな活動とし、それが保護者同士の交流につながる、例えば「おやじの会」などの学校支援に多くのご支援が得られることを切に望みます。(中1保護者)

「動物との『かべ』が消えた気がした」

飼育サポートに参加してみる？してみる！という軽いノリから始めた飼育サポート。実際に行ってみると、大変だし、そうじだけだし、自分の苦手な事ばかり。でも3～5回行ってみると、あれ？今日チャボの様子が変わらない！？元気ないね…など自然に動物のことを気にかけていて、自分でもビックリしました。少し飼育サポートしただけなのに、動物との『かべ』が消えた気がしました。飼育サポートは、動物との境目を消してくれる大切なことだと思います。(中1女子)

「1つの命を養うことがどんなに大変か」

私は以前からペットがほしくてたまりませんでした。なぜかという、かわいい動物に毎日ふれあえるからです。それで、し育サポートにおうぼしました。うさぎやチャボはとてかわいく、一目で好きになりました。なかでもチャボはとて利口で、とても気に入りました。し育サポートをしたいつかの日に、チャボの数がぐっと減りました。それ以前にもうさぎが死んでしまったことがありました。それを知って、私はペットだって別れるときが来ちゃうんだなと思いました。世話も大変です。し育サポートでは、3、4人で世話をするのでいいですが、家では一人ではなければなりません。し育サポートをして、1つの命を養うことがどんなにたいへんか思い知らされました。ペットを飼うのは当分おあずけかもしれません。(4年女子)

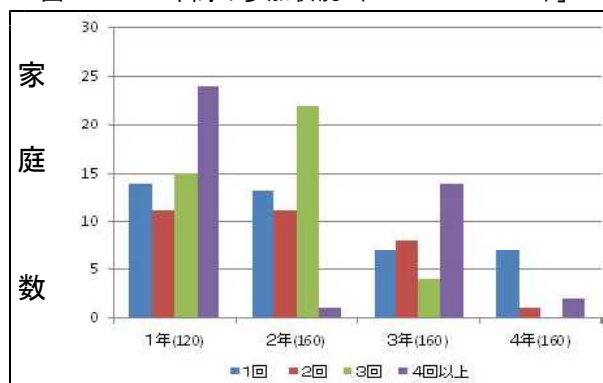
(2)「親子飼育サポート活動」の評価

①活動への参加状況

活動に参加している児童のほとんどが4年生以下であるため、右上のグラフには1年生から4年生までの1年間の参加状況を示した(図4)。学年別に見ると1年生の参加がいちばん多く、学年が上がるにつれてだんだんと減っていく(調査をした2010年度の在籍児童数は1年生120名、2年生以上は160名)。活動に参加した家庭数の合計は166(全家庭

の18.6%)で、そのうち3回以上活動したのは82家庭であった。

図4 「1年間の参加状況(2010.3～2011.2)」



②アンケート調査の実施

活動を評価するため、質問紙法によるアンケート調査を行った(2011年1月実施)。調査の対象は1年間で3回以上活動した熱心な親子(82家庭)とし、うち69家庭から回答を得た。主な調査内容は、獣医師の中川美穂子氏が提唱する「動物飼育体験の意義①～⑧」に対する保護者の考えを問うものである。結果は図5のとおりで、「■たしかに思う」と「■少し思う」の合計は、すべての項目で8割を超えた。

●アンケートの質問内容

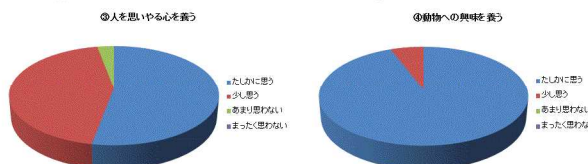
獣医師の中川美穂子氏は動物飼育体験の意義として次の①～⑧を挙げています。親子飼育サポート活動の体験を振り返りながら以下の項目について、あてはまるところに○をつけてください。

- ①命の大切さを学ぶ ②愛する心の育成を図る
- ③人を思いやる心を養う ④動物への興味を養う
- ⑤ハブニングへの対応力を養う
- ⑥疑似育児体験が行われる
- ⑦心の緊張を緩める ⑧子どもの心が見て取れる

結果①「命の大切さを学ぶ」 結果②「愛する心の育成...」



結果③「人を思いやる心...」 結果④「動物への興味...」



結果⑤「ハプニングへの…」 結果⑥「疑似育児体験…」



結果⑦「心の緊張を緩める」 結果⑧「子どもの心が見て…」

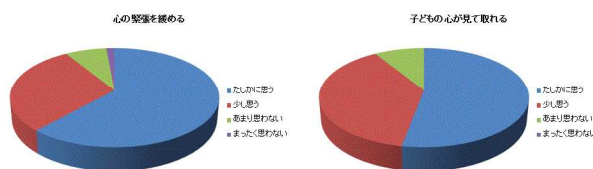


図5 アンケート調査の結果



(3) 授業実践を振り返って

① 児童の気づき、思い、願い

第1, 2時の活動後に児童が書いた学習カードの記述内容は、多岐にわたっている(表5)。多くの児童が自分からすすんでうさぎとふれあうことができたが、うさぎが近く来ると消極的になってしまう児童、体をこわばらせてしまう児童も一部には見られ、記述からはそういった気持ちもうかがうことができる(下線部)。

表5 「学習カード(第1,2時)の主な記述」

●主な気づき
・4羽の性格が違う(18名)
・本物はぬいぐるみよりもやわらかい(8名)
・色や模様がうさぎによって違う(6名)
・ <u>ひっかかれた</u> (5名) ・ <u>かまれた</u> (3名)
・なでていると気持ちよさそう(2名)
・本物は重い(2名) ・ <u>本物はこわい</u> (2名)
・慣れてくるとおとなしくなった(2名)
●主な思いや願い
・またさわりたい(7名) ・楽しかった(6名)
・かわいい(6名) ・さわれてよかった(4名)
・さわって気持ちよかった(2名)
・家で飼いたくなった(2名)

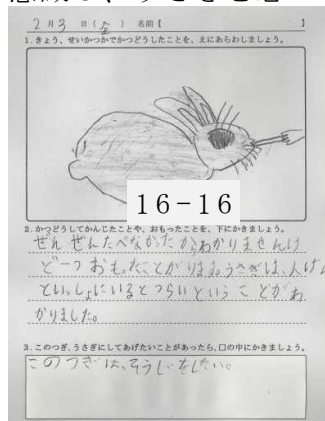
② 学習カード(第3, 4時)の主な記述

— 徐々に見えてきた「生命尊重」 —

「うさぎはにんげんといるとつらいということがわかりました」(学習カード右上)「きらくんはちょっとあばれんぼうでした」といった記述からは、動物と人間との共存、共生という問題への意識を読みとることができ

る。これらの記述をした児童は、続けて抱かれているうさぎがじっとしていられなくなっている様子を見て、このような認識をしたものと思われる。

「すごくびんかんできづきやすい」「うさぎがおどろかないようにしずかにさわってあげたい」といった記述からは、うさぎを自分とは違う他者として意識し、うさぎを思いやる気持ちを読みとることができる。また、「ちょっと口にたべものをいれすぎだなとおもった」という記述からは、食欲のないうさぎの口に食べ物を無理やり持っていく友達の姿を批判している様子うかがうことができる。



▲学習カード(第3, 4時)

8 成果及び今後の課題

「小動物飼育サポートネットワーク」が構築されてから、「小金井小の動物たちは人に慣れていきますね」とよく言われるようになった。愛育委員会や親子飼育サポートを中心とした熱心な取り組みが、このような好意的な評価につながっていることはまちがいない。また、児童や保護者による努力だけでなく、飼育舎の補修等では用務主事、専門的な支援では獣医師の方々からも多大な協力を得ている。学校と関係者が連携した取り組みは今後も続くが、本校の動物飼育を支えてくれるすべての方々に、改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。

課題としては、生活科学習としての実践の積み上げが、未だ十分でないことを挙げることができる。今後は動物を介在した1, 2年生の交流や、いわゆる「成長単元」の学習で動物を活用した実践を行うことが必要である。

「成長単元」の学習では、うさぎの家族を教材として取り上げ、児童が自分自身の成長とうさぎの成長をともに振り返ることにより、生命の連続性と継続性に気付かせていきたい。

(東京学芸大学附属小金井小学校副校長)

